

ソビエト行・・・・・・・・一九六七年四月～五月

全ソ青年団体協議会の招きで「青年ジャーナリスト代表团」の団長として、
ヶ月間ソ連各地（ナホトカ、ハバロフスク、モスクワ、キエフ、バクー、レニ
ングラード）を旅した。アレンジしてくれたのは社会党機関紙局の加藤宣幸さ
ん。

棧橋に議長・助役ら幟振りて われの訪ソを祝してあるも（横浜港大棧橋から船出す）
棧橋のどよめきのなか妻子ら遠去りて 初外国（とづくに）の旅われはいま発つ

（この航路で有名なのはバイカル号だったが、僕らはトルクメニア号だった）

船員の半数近くは女なり「トルクメニア」はソビエトの船

船室を拭きておりたるたくましき スラブの女はげしく吐けり

これがこれ社会主義なるかナホトカに 一步印せし街のわびしさ

アムールの結氷解けて渦巻ける はるか彼方に中国の岸見ゆ（ハバロフスクにて）

墓守の老婆着ぶくれてつつましく 日本人墓地の隅に座しおり

（シベリア抑留で亡くなった日本兵の墓はロシア人が丁寧に管理していた）

わきつのるわが想いこめイリュージョン モスクワ向けてハバロフスクいま翔つ

白皚々（がいがい）のシベリア大地翔びゆけば この広漠の地になお人の住めるか

霧ふかきドモジエドヴォ空港に降り立ちて モスクワの冷氣息ふかく吸う

縦の木と白きリンゴの花の下 わが愛せるマヤコフスキーは眠る

(マヤコフスキーは革命詩人、後に革命に失望してピストル自殺)

ロシア人とスターリンについて激論せしは モスクワ大学の花咲ける広場

レーニン廟に数千の民列なして「赤の広場」に陽はふりそそぐ

花に埋もれ眼を閉じてありレーニンは 生けるがごとくもの想うがごとく

レーニンは労多きかな死してなお 民衆の教化にいまも働くか

クレムリンに二十一発の祝砲とどろきて 革命五十年のメーデーいまぞ始まる

ごうごうと戦略ミサイル砂塵蹴って 赤の広場にどよめきあがる

はなやげる市民パレードさわやけく ミサイルにまさりてわが心うつ

ドル無きやとわれに問いたるかの少年 利発なる眼にかなしみの影あり

緑濃きモスクワ裏通りそぞろゆけば 超ミニの美女腰ふりてゆく

キエフ行きの汽車で会いたる浅黒き アルジェリアの闘士指もげてあり

みはるかす緑のキエフ春たけて ドニエプルの岸边シェフチェンコ想う

(シェフチェンコはウクライナの国民詩人)

美わしきソフィア寺院を案内せし ミセス・ターニヤの青く澄める瞳

ロシア式の男同士の抱擁に いたく感動すキエフ駅頭

キエフなる共産青年同盟(コムソモル)議長は美女なりき 栗色の髪西陽に燃えて

風の街バクーの夜に降り立てば 水着の乙女らスマイル持ちて迎う

(海岸の保養所に泊っていたウリヤノフスクの女工さんたちだった)

バクーなる歴史博物館の事務員の 白きセーターは日本製なりき

カスピ海のかなたはペルシャなりこの夕べ バクーの街でアラブの歌聞く

炎熱のバクーより翔べばレニングラードは氷雨 この大いなる国大いなる季節

(五月なのにバクーは38度、レニングラードは3度だった)

氷雨ふるネフスキー通りにわれ佇ちて ロシアの生きし一世紀を想う

蜂起せるかのオーロラの英雄も いままるやかに昔を語る(巡洋艦オーロラ号にて)

名にしおうエルミタージュに入り来れば 圧倒してくるこの美のエネルギー

冬宮の庭を歩めば民衆の 蜂起せる日も遠く偲ばゆ

ヒットラーの包囲に斃る九十万 眠るピスカリヨフ墓地春まだ浅き

(独軍の三〇〇〇日の包囲で九〇万人のレニングラード市民が餓死した)

ヒットラーの包囲破りし丘の上に ロシア人とともに樅の木を植う

(正面に向かって左側、奥から四本目の木)

潜行(のが)れたるレーニンの棲みし小屋ありて ラズリフの湖いま静かなり

レーニンの船着場てう白樺の 林の岸辺一人佇つ女童(めわらべ)

静寂(しじま)なるフィンランド湾白夜して 寒風のなかに佇ちつくす二人

北欧の白夜美しければ年老いし わが父親に一目見せばや

人間わばモスクワは散文 レニングラードは詩とわれは答えん